
短編? : 愛情のシェイクスピア

月丘ちひろ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

短編?： 愛情のシェイクスピア

【Nコード】

N9884M

【作者名】

月丘ちひろ

【あらすじ】

主人公の愛流あいるは有名演劇部の常連ヒロインだったが、

その座を入部してまもない女の子に奪われてしまい。哀しみにふける。

そのとき、幼馴染ただしの忠がやってきて……

（前書き）

文章量は少ないので気軽に読んでください。

感想もらえると喜ぶ類の人間です。

本文：

中庭のアサガオは美しく咲いていた。絡みつくツルは七月の青空へ背伸びして、地面の下では水を求めて足を伸ばし続けている。アサガオも氷バケツが欲しいのだろうか。

私は微笑ましい気持ちでアサガオを撫でて、大学の1号館へと戻る。試験が早々に終わることは望ましい。夏休み期間前から夏休みになる。

一号館は芸術センターと呼ばれ、設備が充実していた。

私の所属する演劇部にとってこの大学ほど、活動しやすい場所はない。

「さあ、みんな！ 始めようぜ！」

演劇ホールに入った瞬間。活気のある男の声がした。

それが私の幼馴染、忠^{ただし}だと気付いたときには顔から火がでる思いがした。

「ちよつと忠、何一人ではしゃいでるのよ！ 見てるこっちが恥ずかしいわ」

「コラコラ、一人ではしゃぐからチームに活気が宿るんやで？」

「どういう理屈よ!？」

私が忠の胸倉を掴んで威嚇しようとすると、

「まあまあ、落ち着いて、愛流^{あいりゅう}」

と、私を宥める人がいた。その人を見た皆は唐突に背筋をピンと伸ばす。背が高くてメガネを掛けたイケメン。

「こ、こんにちは、高井先輩、い、いえ……監督！」

「リオでいいよ。愛流」

クスと、高井先輩が笑った。笑った!! 超かつこいい!!

私の頬はそれだけで熱を帯びる。

ただえさえ真夏のだから。額が汗ばんでしまふ。そんな姿を高井先輩に見られるのは恥ずかしかったから、私は顔を手で覆ってしまった。

「ふん、今更大和撫子らしい振る舞いしちゃってもねえ……目玉焼きすらまともに作れないという事実は隠しきれない」

「うるさい、バカ忠！ 死ね！」

私は忠のオイル如く滑る口に、バッグを丸ごと投げつけた。運よく化学反応でも怒ってその口がサビついてしまえばいい。

「まあ、妻夫漫才は置いといて、これから配役の発表を行いたいと思う」

高井先輩の一声で、ホールは静寂する。今回の演劇はそれだけ重要度の高いものだった。

高井先輩が監督に就任してから、私達の演劇部は世間から注目を集めるようになった。オリジナルの脚本は2回連続で脚本賞に輝き、演技力も世間で評価され、プロに混ざって公演することもあった。

それだけに高井先輩が手掛ける3作目の注目度も高かった。うまいけば、役者の世界に潜りこめる。そんな期待さえも、部員達は抱いていた。

ちなみに、自慢をするならば、これまでの高井先輩の作品で主人公を演じたのは忠、ヒロインを演じたのは私である。

「主役は、岡島 忠、そしてヒロインは」

しかし、人生はそんなに甘くないらしい。

「宮崎 可奈」

高井先輩の声に誰もがどよめいた。可奈は演劇部に入部したばかりで、台詞の少ない脇役として舞台に出た経験も二度くらいしかない。

そんな女の子がなぜ、大舞台の中心となる役割に就任したのか。その理由を私は推測できなかった。

むしろ、シヨックだった。何年も経験を積んでヒロインにまでこ

ぎつけた私が、入部して半年にもみたない。新入部員に役を取られるなんて……

心のなかで思いを巡らせる間に私の役が発表される。

ヒロインを恋敵とする女。

それが私の役割だった。

自宅で改めて脚本を呼んだ。何度も何度も読み直した。内容はシエクスピアがハッピーエンドを描くような、そんな感じ。

「……だからってラストシーンに主人公とヒロインのキスシーンがあるってどういうこと!？」

私は、忠と可奈の姿を思い浮かべる。忠は女子部員に人気があった。背が高く筋肉しつで、お祭り男のように明るい。特に、可奈はその傾向が強かった。忠にお弁当作ってきたり……飲み物買ってきたり。可愛い後輩の如し。可奈が忠のことを好きなのは周知の事実だ。

私は、主人公とヒロインのキスシーンを思い浮かべた。脚本によれば、星空の下でキスして暗転。幕が閉じるらしい。きっと、それはロマンチックで興奮する。

「忠は彼女作ったことないからなあ、可奈と付き合うかもなあ」そう思うと、少し寂しいかもしれない。忠が彼女を作ることがあれば、私という存在は邪魔になる。これまでのような付き合い方はできなくなる。

……忠との距離が遠くなる。
まるで、忠に置いていかれるような気がして。私はとても苦しい気持ちになった。

立ち上がる私。メイクセットの鏡に写る。

「……肌、荒れてるなあ」

とても狼狽した表情をしていた。

それはまるで……ヒロインを妬む女のようなようだ。

「適材適所……高井先輩ってやっぱ天才」
そう呟いた。

そのとき、

「愛流！ おきてるかぁ？？？」

騒がしいお祭り男の声が外から聞こえた。

私は驚いて窓を開ける。

一軒家の私の家、その中庭に忠の姿があった。

「うるさいわよ！ 騒ぐ暇があるなら練習しなさい！」

「だ・か・ら・さ、練習付きあつてよ！ サラ！」

サラ、それはヒロインの名前。

忠は、練習の前から役に入る癖がある。それだけ本気という意味だ。

「う、わかったわよ、家、入って」

「いや、外でやりたいから、お前が出てこい」

「はぁ？」

「……頼む」

低い声で忠が言った。

「……ちよつと待ってて着替えてくるから」

私はクローゼットから服を出し。着替えを始めた。そのとき、鏡に自分の姿が映る。

「悔しい、なんで私は笑ってるのかしら？」

さらに悔しかったのは、忠が練習場所として選んだ場所だった。
がさつで、適当な忠のくせに。

「……キレイ」

私はそう言わざるを得なかった。

場所は公園、住宅街から少し離れたその場所は明かりが少ない。

空は雲一つなくて、星空がラメのように輝いている。

「世界で最高の舞台だろ？ 天然の舞台会場。ギャラリーは人間様より遥かに多い大自然ってわけ」

「う、うん……」

「それじゃ、始めよう。サラ」

私は、大舞台でヒロインの役に任命されたのである。

実際の役割とは違うが、私はヒロインの台詞を全て暗記していた。

何遍も何遍も自宅で読み返していたから。

忠の演技は上手い、とても声が通って、ドキ、とさせられる。

舞台の上の忠は、男前な主人公そのものだ。

『サラ！ 行っちゃだめだ！』

『どうして！？ あなたには愛してくれる人がいるじゃない』

やばい、感情がこみあげてくる。

『あなたのために尽くして、あなたのために自分を捨てて、あなたのために息をする。そんな人がいて何が不満だというの！？』

胸が苦しい。悲しい。

『不満だ！ オレのために尽くして、オレのために自分を捨てて、オレのために息をしてくれる。そんな人がオレの前からいなくなるうとしているのだから』

『わけわかんないよ！』

『分かれよバカ！』

忠が、私の肩を抑えて向き直らせる。忠の強い瞳が私の眼を離さない。

『サラは、オレのために叱ってくれる。サラはオレのために自分から身を引こうとしている。サラはオレのために生きようとしている。そんな女は平和な国や紛争地帯を渡り歩いてもお前しかいないんだよ！』

……胸がドキドキする。

ちよ、なにコレ。

『私は、た、ただ……』

『サラ』

気づけば、私の背中には木があった。

忠の瞳を逸らすこともできない。真剣な忠眼を見つめる意外にすることがない。

……やられた。

『お前のことが好きだ。愛している』

もう、台本にあるヒロインの台詞は一つしか残っていない。

『サラ』

次は主人公のプロポーズの台詞だった。忠の顔が近づく。鼻と鼻がこすれそう……

そのとき、忠は笑った。

『キレイな形の目玉焼き、つくれる女になろうな』

それは完全にアドリブだった。

でも、ヒロインに与えられた台詞にアドリブの余地はない。

『……はい』

笑ってそう答えるだけなのだから。

そして、私の身体は木の幹に押しつけられる。

動くものは忠の顔しかない。全ては忠の思うがまま。

私の唇に忠の唇が重なった。

私の視線の先にネオンのような星空が映る。

（星空の下、主人公とヒロインはキスをする。そして暗転、幕を閉じる）

ギャラリーの草木がサラサラと歓喜をあげた。

私は、そっと、瞳を伏せていく。

そして、ゆっくりと、目の前に映る景色が暗転していく。
大舞台はこうして幕を閉じた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9884m/>

短編?： 愛情のシェイクスピア

2011年1月4日02時56分発行